

第3回研究会報告 松本潤一郎、及川淳子、陳継東……(1) / (第4回研究会要旨) 香港の60年代—映画『ワイルド・ブルッド』に見る文革の影 佐藤賢……(4) / 書評●福岡愛子『日本人の文革認識』 前田年昭……(8) / 「むちゃくちゃだ」と「すばらしいことだ」—日本文化大革命四十周年に際して 前田年昭……(10)

## 第3回研究会報告

### “殺さず生かす”理念は労働と教育の何を変えたのかを論議

7月30日(木)、第3回研究会がもたれた。前田年昭から「プロレタリア文化大革命は労働観、人間観の何を変え、何を変え得なかったのか」との報告がされた。

配布資料

・「トイレ掃除の女性を馬鹿にした学生。しかし、ある男性の一言に彼らは凍りつく」grapee.jp/68963 ネット記事コピー

・前田年昭「神戸芸術工科大学で共に学ぶすべての教員、職員、学生の皆さん！」(2015.6.20)

・堀口正「中国・知識青年の下放(上山下郷)運動とその役割」(『東アジア研究』大阪経済法科大学アジア研究所 第63号、2015年、47-63ページ)

報告は、肉体労働や清掃労働に対する賤業視、労働観を変える可能性を持ったプロレタリア文化大革命が実際には労働観を変えるまでに至らず未完に終わったのではないかという問いかけであった。報告者は冒頭、第2回の矢吹報告を批判し、中国社会の三層構造の把握は頂点ではなく下層の分析が眼目と提起した。また、映画『イマジン』(2012、監督アンジェイ・ヤキモフスキ)や地元・関西での野宿者が見えるかどうかを巡る妹との対話をひきながら、同じ現実を生きていても、闘うものにしか見えない事実があると指摘した。

以下、質疑応答から一部を紹介。

まず、幹事から、前回の矢吹報告に対する批判は、少し偏っているのではないかという感想が出された。矢吹は、基盤固めの弾圧があってよいとは言っていない。そういうことが続くだろうと言った。また、政局のみの分析が有効なのかという報告者の異議に

ついても、最高権力層の分析は、下層を理解するためにも必要ではないかという感想が出された。

続けて、ある参加者が、次のような感想を述べた。弾圧がずっとこのままではないだろうという楽観的にとらえるかどうかは別の問題点として、個人的には、いかに過渡的であったとしてもいまの弾圧はひどいし、疑問である。現代中国は、習近平分析だけではなく、毛沢東分析にもひきずられ、関わる部分があるので難しいと思う。また、質問として「文革がやり足りなかった」という発言は、どういった意味でか。中国国内の敵対意識は根強いものがある。劉曉波が「それでも敵はいない」といつてのけた言葉にすごく重みがあるように思う。

ここの感想に対して、報告者は次のように答えた。中国は殲滅戦の歴史が長い。例えて言えば、中国将棋は殲滅戦。日本将棋はそうではない。毛沢東は「敵」を殺さない日本将棋をやろうとしたのではないか。文革で出てきた敵は、自分自身のなかにある古い考え方を叩き出すこと。そこが唯一、良い考えかたでその不徹底、やり足りなかったところではないか。分析し、論争することが間違った自身の考えを変えていく。失敗は成功の母というのが、革命の立場だと思つと応えた。

別の参加者は、報告者がとりあげた謝晋監督『芙蓉鎮』をめぐる、次のように述べた。『芙蓉鎮』はつまない映画だった。時代的制約があるにせよ、映画で人を泣かせることは簡単であり、そういう映画でしかない。文革を篡奪した映画かつ泣かせる映画としてしかできていないことに腹立たしさを覚えた。文革を考えると、悲劇的なことがあるが、正

の部分をもどのようにみていくのか。報告者は、文革の造反派＝大衆叛乱ということに目をむけるべしという論であるが、それ以上に、文革によって死んだ人、屍に目を向けないとだめではないかと思う。それは反右派闘争、抗日戦争にまで遡らなければいけない。死者に向き合うことが、文革に対するひとつの向き合いかたにしなければいけない。また、報告発言であった汚い、きれいについて。美醜は個人の差異があるが、多くは環境が関わる。そういうときに汚いものをきれいに思わせることは無理だろう。個人個人にある根源的な感情を押しつぶし兼ねない。きれいなものに引き上げていくという思考が重要ではないか。結局、貧富の差や学歴の差は避けがたいところがある。相互をどのように認めていくか、そこが文革の視点になるのではないか。

別の参加者は次のように述べた。文革を悲劇的にみるか、反抗精神としてみるかによって、文革のイメージは違ってくる。例えば、自分の連れ合いが今回の研究会に参加していたら、今回の報告を批判するだろう。自分にとって、「文革は間違っていない」という意見は衝撃的だった。ある場面では、そうだったかもしれないが、全体的にみれば、反発が出ると思う。しかし、中国国内では文革研究が無視されていることも事実。現実から生まれた社会批判が、文革の研究では忘られている。中国の文革研究が真正面から文革に向かい合っていないことはよくわかったが、報告の結論に対しては賛成できない。

次のような意見もあった。報告者が言うように、他人を変えるのではなく、自分を変えていくというのが、可能性としての文革であるとしたら、現状をどのように捉えられるか。報告者が言及したピケティの考えは、現状のシステムは変えられないということを前提している。格差が広がるから、富んでいる者から税金をとって、貧しい者へ渡してやればよいという発想であり、根本を変えるものではない。首相官邸前のデモもそういう感じを受ける。自分たちが正しく、彼らは間違っていると前提にしている。彼らのなかには、現政権も入っているが、それ以外の人も入っている。人は変わらないという前提で行動している。果たしてそれで社会運動になるだろう

かと思う。その部分が可能性として文革を通して、みていけるのではないだろうかと思った。

また別の参加者から以下のような発言もあった。文革前に延安の文芸講話があった。労働者の国になったのだから、労働者を主人公にした芸術の必要性を感じ、そして懂れた。文革の始まりはそのような作品がたくさん出た。また、毛沢東が若い人たちを指導したという、その真相については疑問が残る。文革は、当時の個々の立場によって、見える側面が違おうし、他からは見えない。いろんな考え方で文革を勉強しなければいけない。

以上のように、さまざまな意見が述べられた。

幹事からまとめとして、文革には複雑な社会情勢があり、それを構造的に研究していくことが提案された。

最後に、報告者から、文革の前史としての60年代の中国がどうだったのか、文革と下放を考えるために60年代前半の労働と教育、社会がどうなっていたのか、皆で考えていきたいと呼びかけがあり、例会を締めくくった。(敬称略、文責・田中)

## 受肉した文化大革命から分業・協業の問いへ

松本潤一郎

第3回本研究会で前田年昭氏は「プロレタリア文化大革命は労働観、人間観の何を換え、何をええでなかったのか」と題して発表を行なった。文革を〈労働者を主人公とする社会〉の構想と実践、その志なかばでの挫折と総括し、そのうえで言わば〈可能性としての文革〉を抽出しようとする試みであったと思う。文革は、下層労働者や農民が主体的にみずからを可視化させ、その存在を人びとにまざまざと刻みつけた経験である。その点が強く伝わってきた。氏自身が文革を体現して生きてきた人間であってみればそれも当然であろう。自分に都合の悪いものは(み)なかったことにするという脱政治化の政治、これが今日の権力形態であると私は考えており、この事態を突破する方法を考えるうえで示唆的だった。突破の一端として、本発表で提起された視点か

ら、分業と労働の専門分化、さらには協業の変遷を、批判的に分析する作業が必要だろう。

## 「同時代史的考察」の重要性と困難さ

及川淳子

第3回研究会は、前田氏のライフ・ヒストリーとも言うべき報告に続いて、参加者による討論が緊張感の中で行われた。筆者は、「文革は間違っていたのではない、いきすぎていたのでもない、むしろ足りなかったのだ」という報告者の文革観には同意できないが、前田氏が語る文革は「造反派としての文革」なのだという土屋先生の解説を聞いて、同意できないながらも理解を深めることはできたと思う。

強く共感したのは、報告の結論とも言うべき「闘うことによってしか見えないものがある」という発言だ。文革時期を同時代の日本で経験した報告者が、文革に学んだことを思想だけでなく行動にまで徹底したことは、中国の問題を同時代に生きる隣人としてどのようにとらえるかという筆者の問題意識にも繋がる。報告者から与えられた課題は、増淵龍夫の「同時代史的考察」という言葉に象徴される。その重要性について再認識すると同時に、困難さを痛感した研究会となった。

## 文化大革命の理念と現実の乖離

陳継東

7月30日第3回研究会で、前田年昭氏のご発表を聞いて、自分と何らかの連結点が存在するように感じた。氏が全共闘運動の関係で、17歳で高校中退(下放)した時は、ちょうど私が小学校一年生になった年であった。また小学校を卒業した年もちょうど文化大革命(文革)の終結になった年であった。私にとっては、後の受験勉強を強いられる時代より、自由に遊べた小学時代はずっと楽しい時期であった。父は小さな工場の責任者で、家も工場の中であって、私も工場の中で育てられていた。その時、私が生活していた町、安徽省合肥では極派(革命の形勢が極めてよい)と屁派(好個屁=とこがよいもんか)と

いう二つの対立する革命派組織による大規模な激しい衝突がもう終息していた。父はそれほどその対立に巻き込まれていなかったため、相対的に平穏な日々を送っていた。

前田氏が指摘された労働制度は、私が日常的に接していた事実でもある。工場の労働者は「正式工」、「合同工」、「臨時工」、「半工半読」、「勤工儉学」などに区別され、「転正」(正規労働者に転じる)へ必死にチャンスをつかもうとした。文革後、工場子弟の就職解決のため、また「知(識)青(年)工場」という付属工場も設立された。1981年に、私は大学受験が終わったら、大学合格をまったく期待しなかった父から「知青工場」に入ろうといわれた。このような労働システムによって、労働者の給料、待遇、社会的な地位さらに人格までも差別化されるようになっていた。これもまた、「走后門=裏取り引き」という腐敗の温床にもなっていた。実際は、当時盛んに叫ばれる社会主義平等理念と相容れないこの労働システムが文革中ずっと実行されていた。前田氏が指摘された文革中の「臨時工・契約工の造反」という現象は、いままで文革研究の中では、真正面から取り扱ってこなかった重要なテーマで、大意味のある問題提起である。

———今後の研究会予定———

第5回 11月26日(木) 専修大学神田校舎  
「私にとっての文革体験」  
報告・朝浩之(編集者)

第6回 2016年1月28日(木) 同上校舎  
「フランスにおける文革受容の一側面」  
——ランシエールとバディウ」  
報告・松本潤一郎(言語労働者)

問合せ先：土屋昌明 [tuwu@s01.itscom.net](mailto:tuwu@s01.itscom.net)

## お詫びと訂正

第3号 4ページ左段 下から13行目

【誤】『芙蓉鎮』(1978)

【正】『芙蓉鎮』(1986、日本公開は1987)

第4回研究会(2015年9月24日)発表要旨

## 香港の60年代——映画『ワイルド・ブリッド』に見る 文革の影

佐藤 賢

### 中国大陸の外の文革視点

文化大革命(以下、文革)を語るとき、とくにその可能性を含めて今日的な意味をさぐるようとするとき、中国大陸において文革がいかなるものであったのかとともに、それが世界の他の地域においていかに受け取られたのか、つまり文革の影響を考える視点が必要である。

では、当時、イギリスの植民地統治下にあった香港においてはどうかだったのか。香港において文革に呼応した動きとして知られているのが「香港暴動」である。香港暴動は、1967年5月九龍新蒲崗の人造花工場の労資紛争における警察との衝突事件を発端に起こった反英暴動であり、翌年1月まで続いた。当初、労働組合を中心に闘争委員会が結成され、交通・公共機関の大規模なストライキに発展したが、7月以降香港政府による弾圧と、それに対して文革に影響された親中左派が、爆弾テロなど過激な暴力手段に訴えたため、多数の死傷者を出し、瞬く間に香港を危機的状況に陥れた。暴動の発生原因として香港政府の社会福祉政策の不備と中国系住民の待遇改善要求などがあげられるが、暴動以後、政府による公営住宅の拡充、労働条件の改善が図られるとともに、また中文公用語化運動がおこなわれることとなった。

### 香港映画監督と作品の考察

本発表は、この香港暴動が映画の中にどのようにあらわれているかを手がかりに、香港の60年代について簡単な考察をおこなうことを目的とするが、とり上げる映画は、ジョン・ウー(呉宇森)監督の『ワイルド・ブリッド [喋血街頭]』(90)である。ジョン・ウーは、云わずと知れた香港映画界を代表する監督であり、近年は、ハリウッドでも活躍する

世界的映画監督である。だが、ウーの映画人としてのキャリアは決して順風満帆なものではなかった。ウーは、1946年中国広州に生まれた。49年に中華人民共和国が成立すると、キリスト教信者であった父とともに香港に移住。映画の世界に入ったのは、69年、23歳のときで、キャセイ(国泰電影)に記録係として入社したのを皮切りに、71年ショウ・ブラザース(邵氏兄弟)に移籍し、張徹の助監督を経て、73年に『カラテ愚連隊』で監督デビューを果たした。初期には時代物からコメディまでこなす職人監督としての技量が重宝されたが、80年代半ばはヒットにめぐまれず不遇の時期を送った。当時、70年代末から80年代にかけては、「香港ニューウェーブ」とよばれる新しい感性や映画技法によって映画を制作する監督たちが、香港映画界を牽引していた。それら新しい映画監督たちに、テレビ界出身者や留学経験者が多かったのに対し、ウーはたたき上げの古いタイプのキャリアを積んだ監督であった。そんなウーにとって起死回生となったのが、86年の『男たちの挽歌 [英雄本色]』の大ヒットであった。スローモーションを多用した舞踏のような激しい銃撃シーンや裏社会に生きる男たちの強い絆と裏切りを描くこの作品は、社会風俗としても若者たちに大きな影響を与え、「英雄片」という新しいジャンルを生み出し、ウーは一躍香港映画界のトップの地位に登りつめた。その後、ウーは、93年に『ハード・ターゲット』でハリウッドへ進出し、『レッド・クリフ』(08、09)などを監督している。

### 香港映画の考察——『ワイルド・ブリッド』

『ワイルド・ブリッド』のあらすじは、およそ次のようなものである。舞台は反英暴動の最中の香港。下層社会で青春を送る、ベン(トニー・レオン)、フランク(ジャッキー・チョン)、ポール(レ

イ・チャーホン)の三人組は無二の親友である。ベンの結婚式の資金繰りを発端とするいざこざでテンピラを殺してしまった彼らは、ベトナム・サイゴンへと逃げる。黒社会の運び屋としてシノギを成そうとするが、爆弾テロ現場に居合わせ、ブツを失ってしまう。三人は殺し屋ルーク(サイモン・ヤム)とともに組織のボスを襲い、金塊を強奪すると同時にルークの恋人サリー(ヨリンダ・ヤン)を救出する計画を立てる。だが、金塊を手にしたものの、銃撃戦の中でサリーは倒れる。そして、サイゴンからの決死の逃避行。生じ始める友情の亀裂。今度はベトコンの捕虜収容所に捕えられる三人。CIAのスパイと疑われて拷問を受ける。大爆発の脱出の中、あくまで金塊を守ろうとするポールは、傷を負って足手まといのフランクを銃撃し、一人香港に戻る。一方、重傷を負ったベンは僧に助けられる。回復したベンは、廃人となったフランクと再会。フランクの苦痛を見るに忍びないベンは自らフランクに死を与える。一方、ポールは金塊をもとに黒社会の大物に出世していた。ベンは非業の死を遂げたフランクの頭蓋骨を手し、ポールに一对一の対決を挑み、炎の中、かつての親友を葬り去るのだった。

### アクションと歴史的背景

「青春」「アクション」「戦争」と本来であれば、3部作にできるような内容が凝縮された『ワイルド・ブリッド』は、興行的には失敗したといわれているが、香港暴動やベトナム戦争など、当時の香港そしてアジアを揺るがした歴史的イベントが物語の背景になっており、たいへん興味深い映画である。映画の中で香港暴動が出てくるのは、まず、オープニングのタイトルバックのすぐ後のシーンである。ベンが退勤したガールフレンドのジェーン(フェニー・ユン)を迎えにいくと、毛語録を片手に大字報を壁に貼る組合員とおぼしき人びとに対して警察官たちが殴りかかり、両者ともみ合いになる場面に遭遇する。ちなみに、このタイトルバックの一連のシーンによって、ベン、フランク、ポールのそれぞれの家庭背景や趣味、そして三人の絆が強いことが効率よく提示されるのだが、その見事な演出は、マーク(チョウ・

ユンファ)とホー(ティ・ロン)の二人が黒社会のオフィスに向かうシーンで、二人のカッコよさと友情、そして香港の現代風俗を一気に見せてしまう『私たちの挽歌』のタイトルバックと同様の手際のよさを感じる。

次に、香港暴動が出てくるのは、殺人容疑で指名手配されベトナムへと逃れざるを得なくなったベンが、最後の別れのためにジェーンをたずねるシーンである。街頭ではデモ隊と警官隊が衝突し、催涙弾を発射する警官隊に対し、デモ隊は火炎瓶や投石などで応酬し、現場は大混乱に陥る。ジェーンを見つけ出し、別れを告げるベン。背後では爆弾処理班が時限爆弾の解除を試みる。しかし解除は失敗し爆発、そして二人は別れるのだった。「必ず君を迎えに戻る」というベンに対し、「無理よ」「どことも同じだよ」「この先どうなるのか……」とかえすジェーンのことばが、その後のベトナムで暴力に巻き込まれるベンたちの行く末を暗示している。

最後は、サイゴン市内の橋で、ベンがサリーと待ち合わせるシーンである。サリーを待つベンは、反戦・反米を訴える学生・民衆のデモに遭遇する。興味深いのは、一人の学生が装甲車の行く手に立ちふさがり、戦争反対を訴えるシーンで、それは六四天安門事件のときに、戦車の行く手を遮る男性をとらえた、あの有名な映像を思い起こさせる。監視役をまくためデモの群衆の中に紛れ込むサリー。だがやがてデモ隊と軍隊・警察が激しく衝突し、サリーはその混乱に巻き込まれてしまう。サリーを見つけたベンは助けに入る。すると、軍隊が発砲し、ベンはサリーを抱きかかえながら、悲惨な光景を目撃するのだが、その瞬間、香港で遭遇した暴動の場面を想起するのであった。

### 暴力のなかにある自伝的要素

ベトナムにおけるデモ隊弾圧のシーンにおいて、香港暴動の渦中でのジェーンのことばが想起されることから、『ワイルド・ブリッド』は、当時、香港、ベトナムと場所を問わず社会混乱の中で振るわれる暴力と、暴力の犠牲になる弱者、そして暴力の狂気の中で傷つく青春や友情を描いたドラマであり、さ

らに容赦なく振られる暴力を執拗に描き出すことで、逆説的に暴力を批判する映画であるといえる。

だが、本発表では、映画の内容からウーがいかなる政治的立場に立つのかを解釈することを目的とはせず、物語運びの本筋とは少し外れたところから、映像にあらわれた香港の風景を手がかりに、ウーの映画と香港暴動が発生した60年代の香港の歴史的文脈との関係性を考察していきたい。そこで発表者が注目したのは、映画の中にあらわれる主人公たちが生活する集合住宅である。それらは大陸から流入する大量の難民を受け入れるために香港政府が建設した「難民アパート」とよばれるアパート群である。そうした難民アパートのうち現存するものの一つが、石硤尾(セックハップメイ)のアパートである。ただ、現在ではアパートとしてではなく、一部が展示館とユースホステルにリニューアルされ使用されている。アパートができる以前、そのあたりは大陸から流入してきた多くの人びとがバラックを建てひしめき合いながら住んでいる場所であった。1953年ここで「石硤尾大火」とよばれる大火災が発生、火は瞬く間に燃え広がり、ほとんどの住居を焼き尽くし、被災者は約5万人にのぼった。それまで香港政府は、住居は住民が自分で何とかするものという態度をとっていたが、さすがにこの火災で重い腰をあげざるを得ず、そして建設されたのが、石硤尾のアパート群であった。ただ、建設されたアパートは、一時避難的な意味合いもあり、非常に簡素なもので、ドアと窓のついた約30平米のコンクリートの空間に過ぎず、トイレ・シャワーは共有、台所はなく、煮炊きは廊下に調理器具を置き、そこでしなければならなかった。そして、何を隠そう、石硤尾大火で家を失いこのアパートに住むことになった者の一人が、ジョン・ウーその人であったのだ。その意味で、『ワイルド・ブリッド』は、ウーの自伝的要素を強く備えた作品であることが分かる。

#### 世代としての原風景

国共内戦の影響を受け、広い意味での「難民」として香港へ移住してきた人々を仮に「難民世代」とよぶなら、1960年代に台頭しつつあった世代は、「難

民第二世代」ともよべる若者たちであり、彼らは親の世代が大陸から香港へ逃れ来て、劣悪な生活環境の中で、生きるために必死で働く姿を子供の目で否応なく見た世代である。映画の中で仲間を裏切るポールの父は、タイトルバックの部分から、国民党軍とともに香港に流入してきた難民であることが分かる。ゴミ集めで生計を立てている父は、「ポール、わしはいんだ」「だが、お前は出世しろ」「この世は金がすべてなんだ」「機会を逃すな」と語る。この部分から、ポールが金に執着し仲間を裏切るのは、単に金の亡者だからというだけでなく、何か父の世代の難民的エートスとでもよべるものが、父から子に強く転移した結果であったと歴史的に解釈することもできる。また、夜の難民アパート群の片隅で、三人が酒をあおりながら語り合うシーンで、ポールが「香港は最低だ」「いつまでたっても貧乏人だよ」「出世したい」「クズでいたくない」というと、フランクが「俺たちなんて風に漂う雑草なのさ」「吹き飛ばされる」「根無し草だ」とこたえる。このシーンは、難民世代の子どもとして香港の都市下層を生きざるを得ない自分たちの境遇をストレートに表現していると理解できる。

だが、ここで重要なのは、三人に代表される難民第二世代が、同時に「戦後(第一)世代」でもあるということである。彼らは、親の姿を見ながらも、一方で戦後の香港で生まれ育ち、香港を懸命に生きる、まさしく「戦後世代」であった。戦後世代の一人であるウーにとって、自らが青春を過ごした難民アパートは、60年代香港の原風景の一つであったといえる。

#### 「非政治化」と自己の模索

ところで、難民世代から戦後世代へと、戦後香港における「本土意識」の変遷と歴史的な文脈を考察する、香港の研究者・羅永生による一連の論考はたいへん参考になる。以下、羅の最新の日本語訳書『誰も知らない香港現代思想史』(共和国、2015)を参照しながら論を進めたい。まず羅は、戦後の香港を理解するには、「難民社会」と「冷戦時代」をキーワードとして理解しなくてはならないと述べる。冷

戦という枠組みで見ると、資本主義社会である香港は西側陣営の一角を占めるとされるが、ただ、冷戦期におけるアメリカの全面的主導のもとに置かれ、ハードな反共政策が敷かれていた韓国や台湾、フィリピンとは状況が大きく異なっていた。イギリス植民地政府は、伝統的に露骨な文化政策を香港に押し付けることはなく、「非政治化」政策を一貫して保持した。また、そのことは香港をとおして新中国と良好な関係を維持するという点でイギリスの極東地区における長期的利益に適っていた。結果、香港は西側勢力の反共宣伝の基地であった一方で、親中左派が反米・反西洋を標榜する統一戦線工作をおこなう場所でもあったのである。そして、1950年代から60年代初期にかけての香港は、大量の移住者があふれていた「難民社会」であったことから、関心を集めたのは、香港の本土政治ではなく、冷戦下の国民党と共産党との政治的勢力争いであった。

それが1960年代後期になると、香港で生まれ育った戦後世代が文化的かつ政治的な主体を形成するようになる。親の世代に由来する「難民意識」を知る戦後世代にとって、当時、有力であった言説とは、「新儒家」による文化ナショナリズム的理想であり、中国文化教育をとおして、多くの香港青年のアイデンティティに大きな影響を与えていた。だが、それが香港暴動によって、そうした理想が、あきらかに現実離れしたものに映るようになったのであった。香港社会の現実をより深く理解しようとする戦後世代は、もはや老世代のように香港にいることを「海外」に漂泊していると捉え、漂泊のエレジーに耽溺することはなく、さらに身近なところで起きる不正義にいつそう敏感であったのだ。羅は、文革の香港暴動に対する影響を次のように述べる。

そもそも騒動を誘発したのは単なる労資紛争に過ぎなかったのに、当時の中国国内の文革に深い影響を受けていたため、瞬く間に暴力的手段に訴えるまでに紛争がエスカレートし、植民地政府全体を揺るがすまでに展開した。さらに左派の中から、中共による香港即時回収を要求する声さえ現れるようになった。このような急進的かつラディカルな政治主張は、暴動の失敗とともに歴史から退いた。しかし、

それはすでに青年世代の心に深く響いていたのである。(…略…)彼らの心を占める大きな問題とは、「香港はどこへ向かうのか？」ということであった。

文革は、香港暴動が急速に暴力化していく要因になった一方で、青年たちに、足元の香港がこれからどうなるのかという心の中の焦慮や不安を深く考え、それを発露することを促す要因にもなったのである。つまり、香港暴動をとおして文革は、香港の戦後世代の若者たちに、「根なし草」的な状態を打破し、香港という自分たちが生きる〈いま・ここ〉を問う「本土意識」を芽生えさせる重要な契機を与えたのであった。

### 経験のなかにある影と矛盾

フランクを殺したベンが、ルークと別れるシーンで、ベン「帰らないのか」との問いかけに、「時代は動いている」「でも俺は生き方を変えられない」「ここに残ってやっていくよ」と、ベトナムに残ることを伝えるルークに対して、ベン「俺は帰る」「ふるさとへ」と、きっぱりと香港へ帰ることを告げる。このやりとりから、時代が大きく変わる中で、香港を「故郷」として認識することに対するベンの明確な態度表明を読みとることができるが、ベンの帰郷があらわしているものとは、「根無し草」の存在から香港を故郷としてとらえなおす、香港の戦後世代に共通する経験のメタファーなのである。

黄曉紅の『呉宇森伝』(2010)によると、ウー自身、香港暴動で目撃したさまざまな暴力シーンが、のちに彼の映画における暴力美学に大きな影響を与えたと認めているという。実際、当時ジョン・ウー青年が、香港暴動に対して、さらには文革に対して、どのような態度をとったのか、それは分からない。ただ、同じく『呉宇森伝』によると、1971年ショウ・ブラザースに移籍したウーは、張徹の助監督をつとめる一方で、「釣魚台防衛運動」などの社会運動に熱心に参加していたという。このことから、少なくとも香港暴動から70年代の「中文公用語化運動」や「釣魚台防衛運動」に続く、戦後世代が経験した歴史を、ウーも共有していたことが分かる。

着目すべきは、香港暴動を契機に、植民地統治下

の社会矛盾を生きていた戦後世代の若者たちが、「香港はどこへ向かうのか？」を問うことから、冷戦的枠組みによる二元対立的なイデオロギーを懐疑し、その紋切り型から抜け出そうとし始めたことであり、その意味で、当時世界各地で既存の体制に異議申し立てをおこなった若者たちの運動とつながるものであったといえる。

さいごに

本発表は、映画『ワイルド・ブリッド』を「故郷回帰」の物語と捉えることで、それが60年代の香港における戦後世代の「本土意識」発見のメタファーであると考へた。ところで、昨今の香港の状況を見

るとき、「香港はどこへ向かうのか？」という問いは、きわめて今日的な思想課題であり続けていることが分かる。そう考えると、前に触れたベンとルークの別れのやりとりに続く次のセリフは含蓄に富んだものと読める。帰郷を告げたベンに対してルークは「故郷は遠いぞ」という。ベンは「でも帰る」とこたえる。香港における「故郷」へ「回帰」とは、一つの未完の運動であり、羅が論じる「本土運動」という脱植民地化の思想的運動こそ、香港における「文革」の意味を問い直すことがもつ思想的な可能性なのではないだろうか。

(さとう・けん、明海大学外国語学部中国語学科講師)

書評●福岡愛子『日本人の文革認識』（新曜社、2014年）

## 歴史から学ぶとはどういうことか

前田年昭

索引を含め450ページを超える大著である。著者自身の言葉によれば「中国の文革に対する認識が、日本でどのように形成されてその後どのように変容したかを、主として、国交正常化前後の「日中」に関わり文革期の中国にコミットした人々の語りをもとに記述」したものである（序章、15ページ）。「事後的な公的言説において全否定され」た文革が「個人レベルではどのような変化として語られ、それは社会的にどのような意味をもつのか」をインタビューおよび文献によって明らかにしようとし、日中復交をめざす政治としての文革認識（第Ⅲ章）、メディアにおける政治としての文革認識（第Ⅳ章）、革命理論・思想として文革認識（第Ⅴ章）、運動としての文革認識（第Ⅵ章）、「六〇年代」の学生運動と文革認識（第Ⅶ章）に続いて「終章 文革認識の語り方と「翻身」の意味」で締め括っている。

結論を先取りして言えば、本書の文革の捉え方は静態的に過ぎ、ために動態的でしかありえない現実の歴史が「後知恵」としてしか捉えられていない。面白さの理由はここにある。

一例を挙げよう。新島淳良（1928-2002）を研究

対象のひとりに採りあげた著者は「新島が当時既に認知しえた否定的事実を自ら封印して、文革礼賛の旗頭役を演じ続けたのはなぜなのか」（183ページ）と問う。そして、言説を追跡して「かつて自らが狂信的に支持し同一化したものに対する訣別宣言は、開きなおりの印象だけが強い」（409ページ）と結論づける。何という倨傲、この視線が終始一貫している。

他方で、著者・福岡愛子氏自身の立場、見解は最後まで明らかにされない。著者にとって文革とは、初期には理想を追求したものが、やがて後期には武闘という悲慘が顕在化し、今では否定されるべき過去だというきわめて“通俗的な”見方を動かぬ物差しとして、動く現実にあてはめる。物差しは、著者自身何の痛みも感じない外部にある絶対的規準なのである。たとえ物差しが主観的にマルクス主義であっても自らの視線への問い直しがなければ、歴史への理解は内面的理解のないあてはめでしかない。

聞き書きとは、対象の人びとの苦悩や恥辱も含む人生を聞き出す作業である。大半は筆者より年長の方でもあろう。彼らの生きた歴史と正面から向き合い、自分自身をさらけ出し、また自分自身の文革観

を逆に問い続けるという内面的な批評と対話の精神が求められる。果たして、その立場と覚悟が筆者にあったのだろうか。私は、取材の労苦に敬意を表しながらも、歴史に生きる一人ひとりを「昆虫採集」のように集めて俯瞰しようとする筆者の立場に対して強い疑問を感じる。学問とはいったい何のため、誰のためのものか、と。

「文化大革命は初期は言論戦だったのに後に暴力沙汰になった」「日本ではジャーナリズムの礼賛報道のため悲惨な暴力的実態が知られていなかった」——いまだにこうした神話が語られているが、当時の報道は初期文革の暴力的様相をしっかりと報じていたという一連の事実を私は「教育革命いまだならず」で網羅的に明らかにした（土屋昌明 編著『目撃！文化大革命』太田出版、2008年、所収）。文化大革命の「暴力」「愚行・悲惨」はリアルタイムで報じられていたし、知りえたのである。報道を責める前に、報道から何も読み取ることができなかったのはなぜか、また、あれほど報道されていたのに半世紀もたたぬうちに記憶が捏造されてしまうのはなぜか、とても興味深い。迎合と蔑視の両極という日本人の中国観の歴史的な特徴がそこに表れている。

文化大革命の「悲惨」な暴力は必ずしも後期になって出現したのではない。文化大革命から暴力を取り除いて何がしかの理想を取り出そうとする試みは事実を直視する勇気を欠いているがゆえにとっても脆いものである。嵐のような民衆の決起は、「専門家」「幹部」「優等生」による日常の暴力、秩序の暴力を打ち破る「素人」「ヒラ」「劣等生」の暴力によって解放され、噴き出した。それまでずっと“役立たず”とバカにされ、“無能”と罵られてきた側からみれば、「むちゃくちゃ」によってはじめて、安心と希望を見いだしたのである。「むちゃくちゃ」こそが「すばらしい」ことだったのである。ここに歴史の弁証法があった。

繰り返すが、理想、理念が後に現実のなかで「悲惨」に転じたのではなく、先行した「むちゃくちゃ」な暴力が「すばらしい」解放を作り出したのである。政治体制が変わった後もなお、沈黙と忍従を強いられてつづけてきた人びとにとっては、「専門家」「幹部」

「優等生」どもが三角帽子をかぶせられて引き回される事実があってはじめて、口を開き身体を動かした始めたのである。

現在を過去の集積と見るならば、歴史に学ぶとは、現在に対するものを見る目、感じる心を打ち鍛えることに他ならない。歴史の理解とは、直面する現実の問題を歴史のなかに見いだすことである。現在と文革の歴史の中に日本の現実を見だし、文革の歴史によって日本の現実を確かめるという、いわば内面的相互作用によって歴史を捉える立場である。

私の尊敬する歴史家、増淵龍夫は、名著『歴史家の同時代史的考察について』（岩波書店、1983年）のなかで、これを歴史の内面的理解として次のように強調している。

そのちがいは、一言にしていえば、魯迅は、陳垣の場合と同じように、歴史の内におり、津田さんは、歴史の外にいる。津田さんの場合には、中国の歴史をどのように批判しても、津田さん自身は何ら痛みを感じない。それは前にも申しのべた通り、合理的な進歩史観という理念が一つの信条として、彼の場合にあり、しかも自分と自分の住んでいる日本の歴史的現実、この進歩の理念に沿うものとして捉えられ、それを自負するその高みから、この外側の規準との比較において、中国の歴史を見おろして、それがいかに進歩の歴史ではなく、その反対の、繰り返しの歴史、停滞の歴史であるか、ということ、批判の意をこめて、類型的なび示そう、とされたからでした。批判の対象の中には、自分はいないのです。それは、いままでも例として申しのべてきた陳垣や魯迅の歴史認識と、全く異なるものといわねばなりません。（『歴史家の同時代史的考察について』106ページ）

文革を、過ぎ去った、外部の、日本ではない中国のこととみるのか、それとも現在に生きる、自らの内部の、日本のこととみるのか。問われているのは、「批判の対象の中には、自分はいない」著者・福岡愛子氏自身なのである。

（ままだ・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師）

蔵出し批評

## 「むちゃくちゃだ」と「すばらしいことだ」

——日本文化大革命四十周年に際して

前田年昭

君らは皆、安楽な生活におしつぶされてしまうのだ（パリの壁）

今年（2006年）は文化大革命から40周年にあたる。その歴史的総括はとても難しい。なぜだろうか。

私は今春、丸川哲史氏の労作『日中一〇〇年史 二つの近代を問い直す』（2006年1月、光文社）の書評を書いた（「ヨーロッパ的近代と対峙したアジア的近代の苦闘」2006年2月24日付『週刊読書人』第2626号）。前著『冷戦文化論』（2005年3月、双風舎）と比べても腰が入らず、結論を“巧みに”避ける記述に対するもどかしさのあまり、私はつつい書評という枠を踏み外して「民権から国権へ「墮落」した日本アジア主義を止揚し、欧米的「近代」に抗した実験こそ中国の文化大革命ではなかったのか」と自論をぶつけた。これに対する丸川氏の「応答」には、文化大革命を考えようとする人びとの典型的な気分が表現されていた。

第一点は、中国文化大革命が西洋「近代」への抵抗を目した一大実験であったことをまずは確認すべきではないか、という批評であったと解釈します。正直、私は文革観がまだ定まっていないのです。それは端的に私の努力不足であるわけですが、さらに言い訳をさせてもらえば、文革を語ることの困難さがどのように引き起こされているのか、一定程度押さえる必要があるものと感じます。まず文革は、中国共産党自身がほとんど全否定に近い形で決着してしまった、またそのためにむしろ問うことが難しくなったという経緯があるようです。そこで感じられることは、文革（と呼ばれる期間）において、結果として多くの悲惨が発生したことは、やはり覆い隠せないことだと思います。ただ問題なのは、その悲惨と文革が担った理念はどのような関係にあるのか研究が必要で

あるということ。さらにまたその悲惨は、かなりの程度、文革それ自体というよりもそれと連動する別の問題から生じたとして、またそれをどのようにカバーするのか、ということも次なる課題となるように思われます。前田さんからの批評に戻りますが、その上で文革が担った理念やその動機の部分をとどのように掬い取るのかという課題は、今後もつきつめなければならないものだと考えます。ただその時、文革が担った理念をとどのように生き延びさせて行くのか、私たちは既にして向こう側の人間たちと共同の形において問題を立てなければならないところに来ているものと考えます。（「文革」と「靖国」について 前田年昭氏の書評への応答」3月10日付『週刊読書人』第2638号）

文化大革命を語る気分とは何か。それは、文化大革命の「理念」と「悲惨」を腑分けし、前者の理想はよしとしながらも後者の暴力の前にたじろいでしまう、そのような気分である。後になって引き起こされた結果の、一部の側面を取り出して、否定したり、留保をつけたりするのは、後出しじゃんけんのようでとてもふざまである、と私は考えるのだがどうだろうか。

もちろん、当時も、文化大革命に共感を寄せた側でも高橋和巳のように理想主義と苦悩に満ちた見方もあった。彼は1967年4月、文化大革命中の中国を2週間にわたって『朝日ジャーナル』特派員として視察、同誌21-23、25号にレポートしている。

他方、初期の段階から「気味の悪さ」「グロテスクさ」を正面から支持する立場と姿勢もまた存在した。

斎藤龍鳳（1928-1971）は1967年秋、次のように書いた。

「むちゃくちゃをやろう！」

「革命は暴動だ」

「行き過ぎをやらなければまちがいはなならない」などと年端もいかぬ子らがわめき、町名を変え、看板を叩きこわしていると思うと、やはりあまりいい気持は持たれないものだ。だが、直感的に、私は紅衛兵運動が持つ気味の悪さを支持したい。なぜなら、革命が暴動であること、ある階級が他の階級を撃破する猛烈な行動であるという認識において……、私と毛沢東とは、それほど違ってゐるとは思わないからだ。（「走れ紅衛兵」『武闘派宣言』1969年三一書房所収、初出は『現代の眼』1967年11月号）

また、津村喬氏は1969年春、次のように書いた。

「グロテスクなもの」についての人類学者たちの研究を引くまでもなく、人は自らの日常性をおびやかす、なにか理解を超えるものをグロテスクという。青木保は、大学とは本来、近代社会において反世界にむかうまつり＝意識下の反日常的非合理性の領域たる「聖なる空間」、「世俗権力に捉われない人間社会の原理をひたすら探求」し「魔神的なものをよびだしつつ追ひ払う」グロテスクな場としてあったので、政治的合理性を排して安田講堂にたてこもった学生たちは、この意味で大学を再聖化したのだと主張した……。日常性対グロテスクなもの、この図式は文化大革命とりわけ紅衛兵運動の全体を一つの方向から照らし出す。革命までも秩序にとりこまれた、といはあらゆる意識が日常性に屈したということである。……文化を革命するには、意識でない深いところからの行為による始まりが必要だ。（「世界のステューデント・パワーと紅衛兵運動」『魂にふれる革命』1970年ライン出版所収、初出は『中国研究月報』1969年4月号）

仔細に歴史的事実を検討すれば明らかになるが、文化大革命の「悲惨」な暴力は必ずしも後期になって出現したのではない。1966年6月1日、北京大学校長陸平を批判した学生の大字報（壁新聞）を毛沢

東が自らとりあげて全国に発表、6月6日には中学生たちが大学入試改革を提案、同月13日、この提案を受けた中国共産党中央と國務院が入試の半年延期、学校閉鎖を通達。これによって紅衛兵運動誕生の最終的条件が成立したのである。

中学生たちの入試改革の提案が「世界革命の根拠地としてふさわしくない」という理由にもとづいたものであったこと、そして、紅衛兵たちによる学校の教師に対する暴力行為のピークは同年7月末から8月中旬までの期間であったこと、に注目する必要がある。

つまり、嵐のような決起は、「専門家」「幹部」「優等生」による日常の暴力、秩序の暴力を打ち破る「素人」「ヒラ」「劣等生」の暴力によって解放され、噴き出したのである。それまでずっと「役立たず」とバカにされ、“無能”と罵られてきた側からみれば、「むちゃくちゃ」によってはじめて、安心と希望を見いだしたのである。「むちゃくちゃ」こそが「すばらしい」ことだったのである。ここに歴史の弁証法があった。

繰り返すが、理想、理念が後に現実のなかで「悲惨」に転じたのではなく、先行した「むちゃくちゃ」な暴力が「すばらしい」解放を作り出したのである。政治体制が変わった後もなお、沈黙と忍従を強いられつつけてきた人びとにとっては、「専門家」「幹部」「優等生」どもが三角帽子をかぶせられて引き回される事実があってはじめて、口を開き身体を動かしたためたのである。

さらに、文化大革命の歴史的背景を理解しようとするとき、重要な事実は、1963—64年の中ソ論争である。詳しくは『国際共産主義運動の総路線についての論戦』（1965年、北京・外文出版社）に出ているが、中国共産党は、ソ連共産党による「平和共存」と米ソ協力が世界の革命運動と民族解放運動を抑圧する暴力、つまり秩序を維持する日常の暴力に成り果てていることを批判した。それゆえ、文化大革命が始まるやいなや、世界のほとんどの共産主義運動、反権力運動は、ソ連を支持する側と中国を支持する側とに分裂した。ここにも、米ソ結託という日常の暴力、秩序の暴力に対峙する批判の暴力によって、

国際的な批判勢力が物質の力になるという歴史の弁証法があった。

では、なぜ、日本の中国研究者、左翼活動家たちは、文化大革命の暴力と悲惨を前にすると口をつぐんでしまうのだろうか。結論から先取りしていえば、自らが怖気づいてしまうからなのである。それは、自らの立場を現状維持、秩序維持の側に置いているところから来る結果なのである。

映画『夜明けの国』が写し撮った威厳に満ちたさすがらしい表情がどこからくるのか、理解できず(さらにいっそう悪いことには、理解できないという不安のまま考えつづけるのではなく、自らの“観念”で解釈してすまそうとし)、「画一的」な「押し付け」によって「洗脳」されているのではないか、とか、「悲惨」な暴力を認めるわけにはいかない、とか、いった自分自身の“観念”(これらの“観念”がいったいどこからきたものか考えてみる必要がある)とのジレンマに悩み、口ごもってしまうというわけなのである。

傑出した中国研究者であることによって、傑出した日本近現代思想家でもあった竹内好(1910-1977)はこの保守意識を「一高―帝大―高文という教育コースと、それに伴う日本的な立身出世の教育精神」であり、これを地盤にした「指導者意識」だと指摘している。

……日本文化の構造がこのように固定したのは、時期でいえば明治十年ではないかと思う。明治維新の革命が、反革命にたいして勝利をえたとき、つまり反革命を圧殺することによってそれ自身が反革命へ転化する方向で革命に成功したときである。明治維新は、革命として成功したことにおいて失敗した。辛亥革命が、革命として失敗したことにおいて革命の原動力を失わなかったのとは、反対である。日本でブルジョア革命が成功したのは、日本にそれだけの物質的基礎があったからだという進歩主義者たちの議論を、私は信用できない。そういう議論を出してくる精神が、やはり日本文化の構造なりに形成されているように思う。つまり一高―帝大型の、指導者型の考え方

だ。日本には、ロシアや中国に見られたような、アジア的な野蛮な抵抗がなかった。つまり反動が力弱かった。その反動の弱かったことが、同時に革命を反革命の方向に成功させたのだと私は思う。なぜ抵抗が弱かったかという点、これも日本文化の構造とつながるのだが、歴史的に形成された日本人のドレイ根性に関係してくると思う。(「指導者意識について」『竹内好評論集 第二巻 新編日本イデオロギイ』1966年筑摩書房所収、初出は『総合文化』1948年10月号)

これを援用していえば、戦後日本は戦後復興と沖縄「返還」を成就したことにおいて反革命に墮し、中国は文化大革命に挫折したことにおいて抵抗の契機をたもち続けているということだ。「専門家」が「素人」をおさえつけ、「都市」が「農村」を支配する社会の基本原理に対する造反＝むほんとしての文化大革命は日本でも中国でも何度でもやる必要がある。

(まえた・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師)

\*本稿初出は、2006年7月16日、東京・専修大学でひらかれた文化大革命40周年記念シンポジウム(主催:専修大学中国倶楽部+土屋研究室)の会場にて配布したもの。シンポジウム後に一部改訂のうえ、ここでは省略した「二」を追補しウェブで発表した。全文は、サイト「書庫:日本文化大革命40周年を記念する」<http://www.linelabo.com/index007.htm>の中におさめられた<http://www.linelabo.com/bunkaku40nen.htm>で読むことができる。

## 原稿募集

本誌「中国60年代と世界」は、前回研究会の記録、参加者の感想、批評をはじめ、研究ノート、書評、映画評など積極的な投稿をよびかけます。

現在、研究会は奇数月最終木曜開会で、会報は同日発行です。事前配布・検討を保証するため、原稿〆切は、例会の一ヶ月前迄とします。(編集部)